遞信省認可

毎月四回發行

いらつめ第四十四號目次（明治卅三年三月九日）

●挿畫…もゑ出る春の若草（色刷石版）

●家政…裁縫獨學び（第十二）……木下貞子

男大人の着物寸法＝女大人の着物寸法＝三身並の寸法＝四身逆袵裁さする時の寸法＝二尺五寸巾六尺丈を以ての三身裁ち方＝丈七尺八寸を以ての一身裁方＝九寸巾二丈三尺とを以ての袖裏及び胴裏の裁ち方＝二尺五寸巾六尺四寸を以ての四身裁ち方＝巾二尺三寸長一丈二尺を以ての女服裁ち方＝並巾八尺を以ての裾まはりの裁ち方

○ぬひ取り獨學び（第二）……神宮峯子

六角麻＝麻桔梗＝折鶴＝獨鈷麻＝十字木瓜

○衛生料理法（第十三）……岩間芳松

鶏、牛房、筍、胡麻煮＝同別法＝糎鶏肉と玉子酢で食べる法＝牛の鋤焼

●文藝美術…五社百詠……俊成卿

○難波船圖題文章淨瑠璃（懸賞文藝）……三坂きぬ＝無名氏

○處女の愛情（懸賞俳句唱歌）……鋤雲山人＝まつの＝岡本皎子＝桂葯小史＝神谷文子＝石川のぶ子＝翠亭

○其面影……美妙齋主人

○俗曲改良家の意見

●通信問答

●餘興

廣告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二十九錢郵税共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵税共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵税共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵税共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六十五錢郵税共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵税共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府内に限り無郵税●毎月四回（九日十日二十四日廿五日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局とある處に（神田郵便局）と記し、受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事●郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り増しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上げます●廣告料一行金八錢、割引無し

從第三十八號至第四十七號十部版權所有

明治二十三年三月八日印刷

明治二十三年三月九日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎

印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野忠吉

發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

本號には**彩色**石版**野外少女**の圖●裁縫縫取●**處女の愛情**といへる懸賞文藝●美妙齋氏の**其面影**等又次號には**蕾の花**と題する少女少年必讀の事**數學談**トランプの數理●日本陶器小史及歐州最近報**花顔玉手秘事**といふ最も駭くべく且最も麗人に必要な事件が載ッて居ます

いらつめ第四十四號

体裁の變更について

いらつめが今月から月二回發兌とする理由は既に前號に述べたとほりたゞ記事などにも殖ゑた事が有るのと體裁とから起つた事で、其外に深い子細も無く、それ故從前のとほり二冊を合本したまゝの風で發兌するのです。

たゞ記事に於ては從前よりも增加した科目が有ります。即ちそれは「苔の花」及び「數學」と題した二項で、「苔の花」には他の婦人雑誌に欠けて居る子供に關する事項を載せ、同じく「數學」には算數に關して有益かつ面白い事を載せて、等しく諸嬢の娯樂と智識とを加へる事をはかります。「苔の花」に載せる事項は少年園や少年文武ほど六かしくなく、また小國民やこどもほど容易くも無く、しかも面白さを專一とするため物語りを多くして之を童兒に示しても愉快、之を大人に見せても喜ばれるやうにし、其文章は最も平易を尚び、それに野卑俚猥の言葉をば全く省き、且つ文脈を正しくして言文一致體にしました。

「數學」に於ては愛顧諸嬢の校外の友となり解しにくい問題などの質疑にも應じ、また一節あつて心得て置くべき事の數學に關するのは一切順々に說明して行きます。凡そこの二箇條は他の婦人雑誌に多分無いことで、愛顧諸嬢に向つてこの新欄御吹聴に氣も進みます。右將來の事につきあらかじめ一言しました。

家政

裁縫獨學び（第十二）

木下貞子

男大人の着物の寸法

袖丈一尺四寸袖口八寸丈け三尺六寸五分行一尺七寸五分襟肩二寸襟巾一寸五分褄下一尺七寸後巾八寸前巾六寸五分衽下五寸抱六寸襟巾四寸相褄巾三寸五分。

女大人の着物の寸法

袖丈一尺四寸五分袖口六寸襟肩二寸五分襟中三寸又四寸袖附七寸五分身の八ッ口三寸行一尺六寸四五分褄下八尺八寸五分身巾後七寸五分前六寸抱五寸五分衽下五寸五分衽巾四寸相褄の巾三寸五分　四分位の縫揚げです。

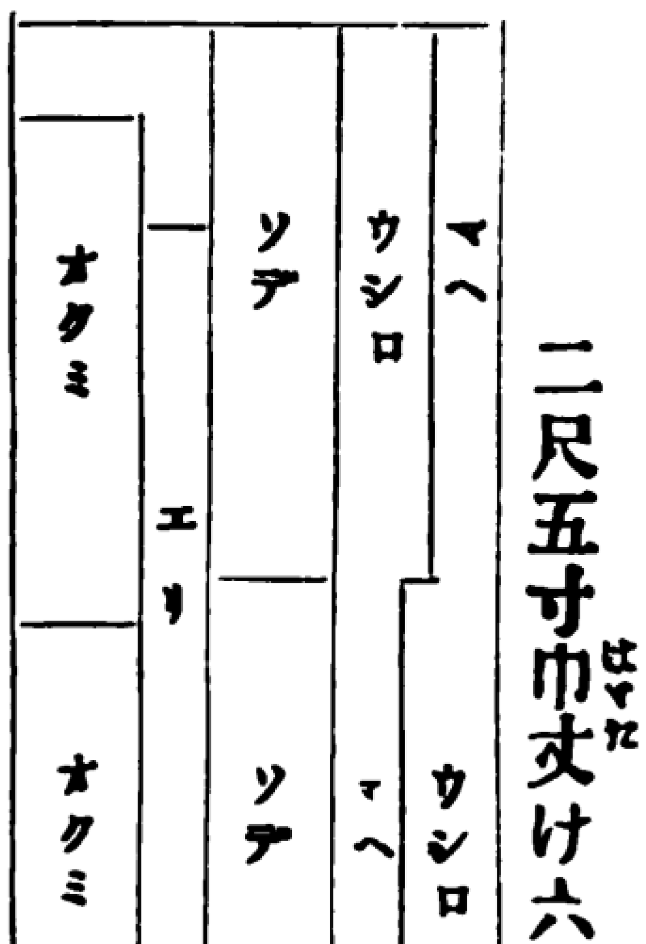
三ッ身並の寸法

袖丈一尺二寸丈二尺八寸襟肩一寸七分衽巾三寸襟巾一寸七分衽下三寸か二寸八分袖巾六寸五分袖口四寸五分袖附五寸身の八ッ口二寸五分褄下七寸前後の身巾イッパイの縫揚りです

四ッ身逆衽裁をするときの寸法

袖丈一尺四寸丈二尺八寸衽は前の身頃から斜にきりおとし襟は脊からきりとるのです。

二尺五寸巾丈け六尺を以て二ッ身の裁方

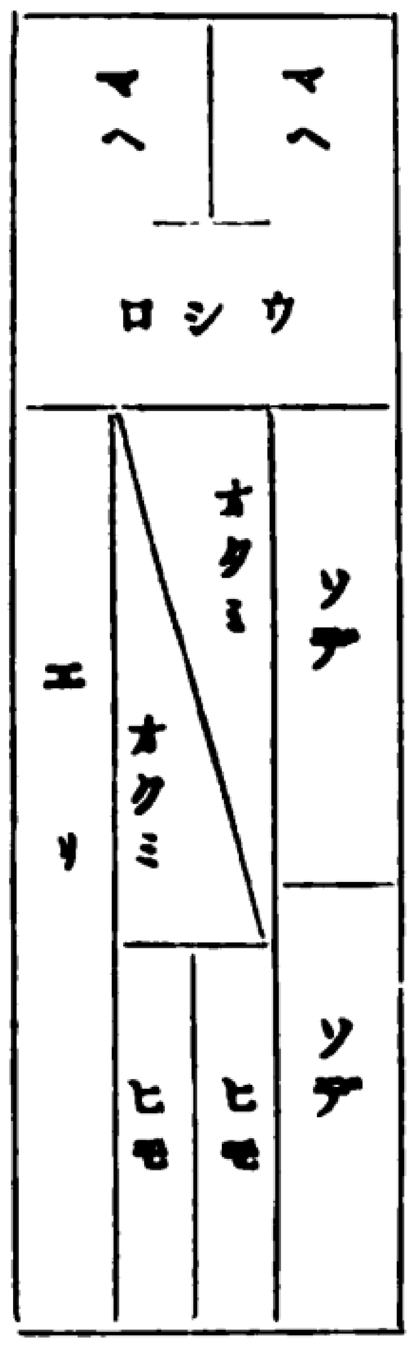


袖丈一尺五寸丈け三尺襟丈け五尺二寸襟巾二寸五分襟肩一寸六分衽丈二尺八寸衽巾三寸四五分です。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

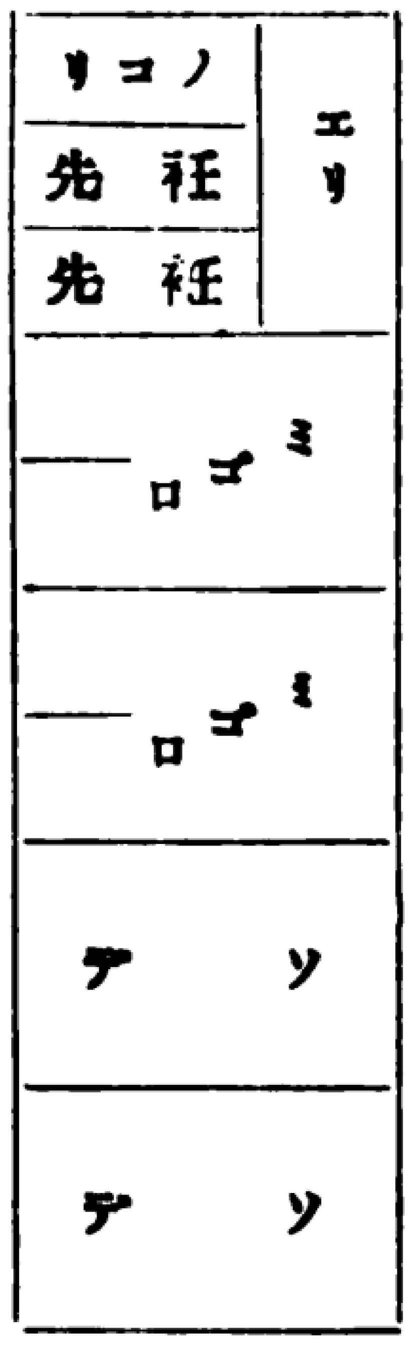
丈け七尺八寸を以て一ツ身の裁方

袖丈　八寸八分丈け二尺襟丈三尺五寸襟巾一寸五分衽の長さ一尺八寸五分衽巾二寸七分襟巾一寸五分紐の長さ一尺七寸五分袖巾四寸七分八厘襟肩一尺。



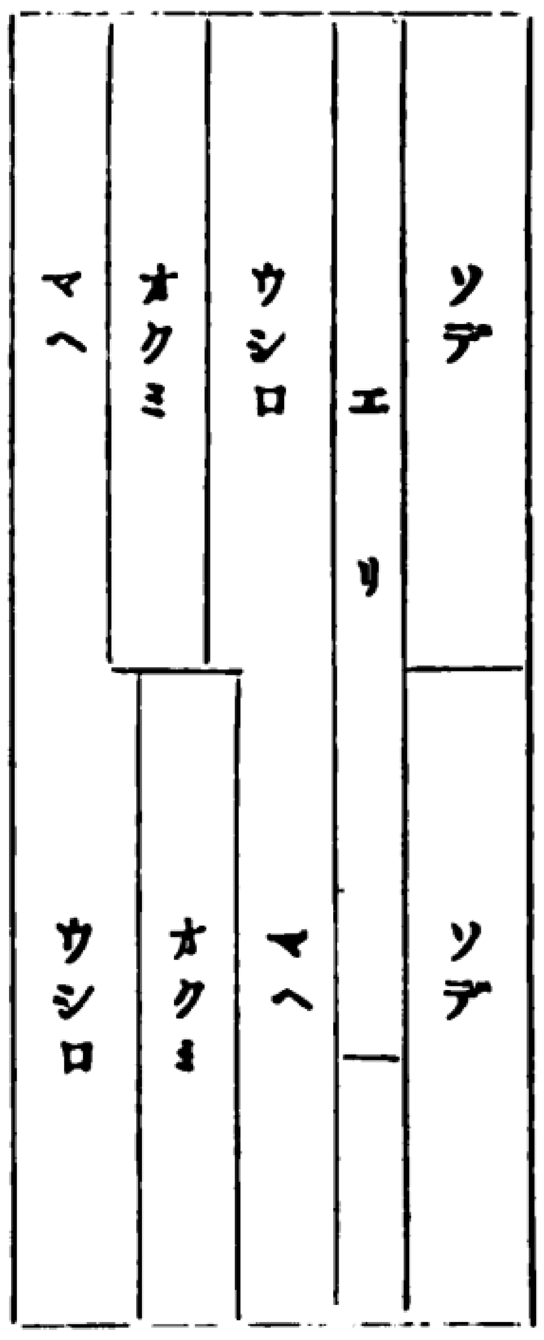
九寸巾二丈三尺を以て袖裏及び胴裏の裁方

襟巾五寸襟肩二寸五分襟うら四尺一寸衽さす一尺二寸丈け三尺三寸五分袖丈け一尺六寸。



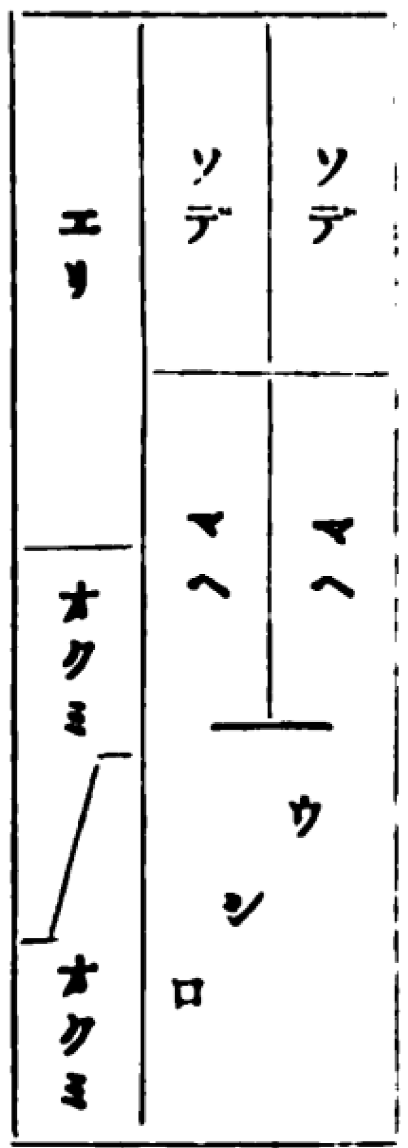
二尺五寸巾六尺四寸を以て四ツ身の裁方

袖丈け一尺六寸袖巾八寸五分衽巾三寸五分丈三尺二寸五分襟丈け五尺五寸襟巾一寸八分襟肩二寸うしろ巾七寸まへ六寸。

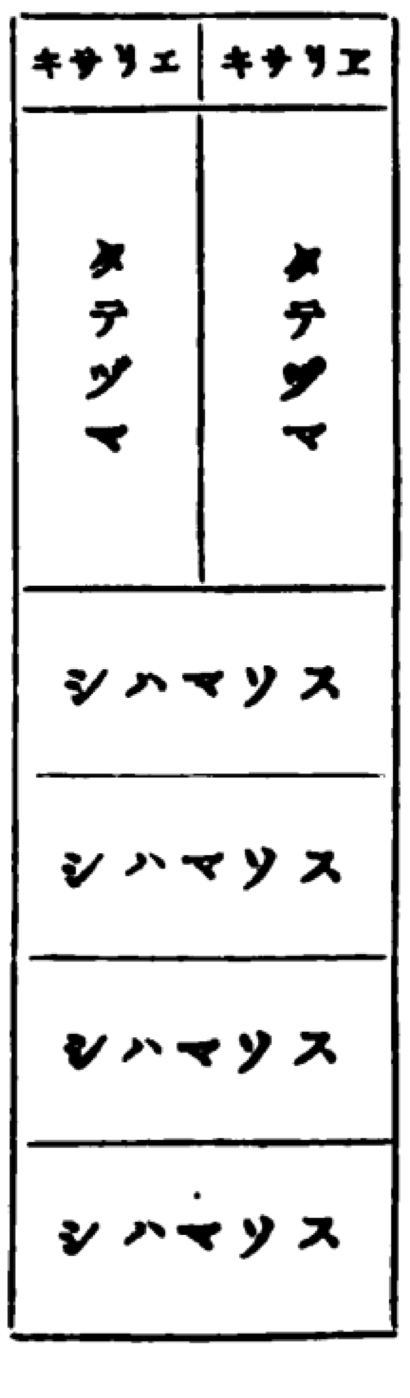


巾二尺三寸長一丈二尺を以て女の服裁方

袖丈け一尺六寸五分袖巾九寸丈四尺三寸襟丈五尺四寸衽地六尺六寸襟肩二寸五分裙下二尺五寸襟巾五寸但し後巾ハ脊を空縫にするのです。



常巾八尺を以て裾廻の裁方



帬の高さ一尺三寸五分たてづま二尺三寸襟先き三寸

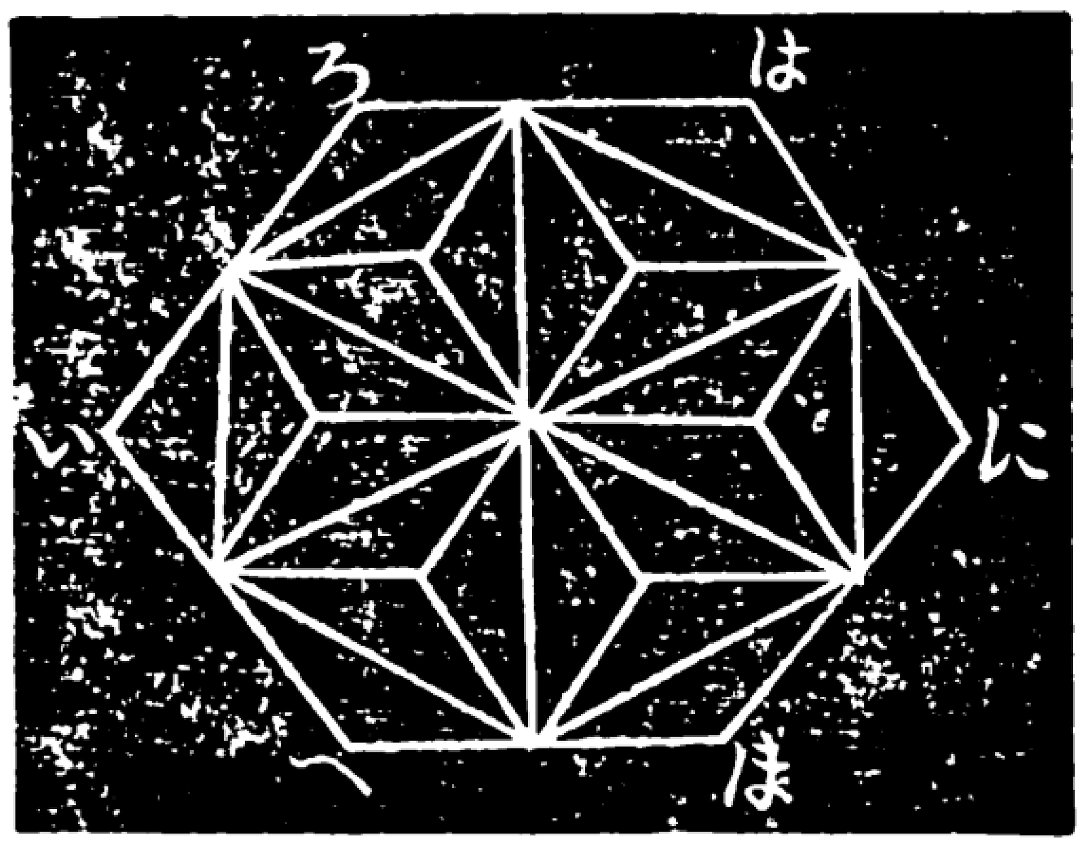
刺繍獨學び（いらつめ四十二號の續き）

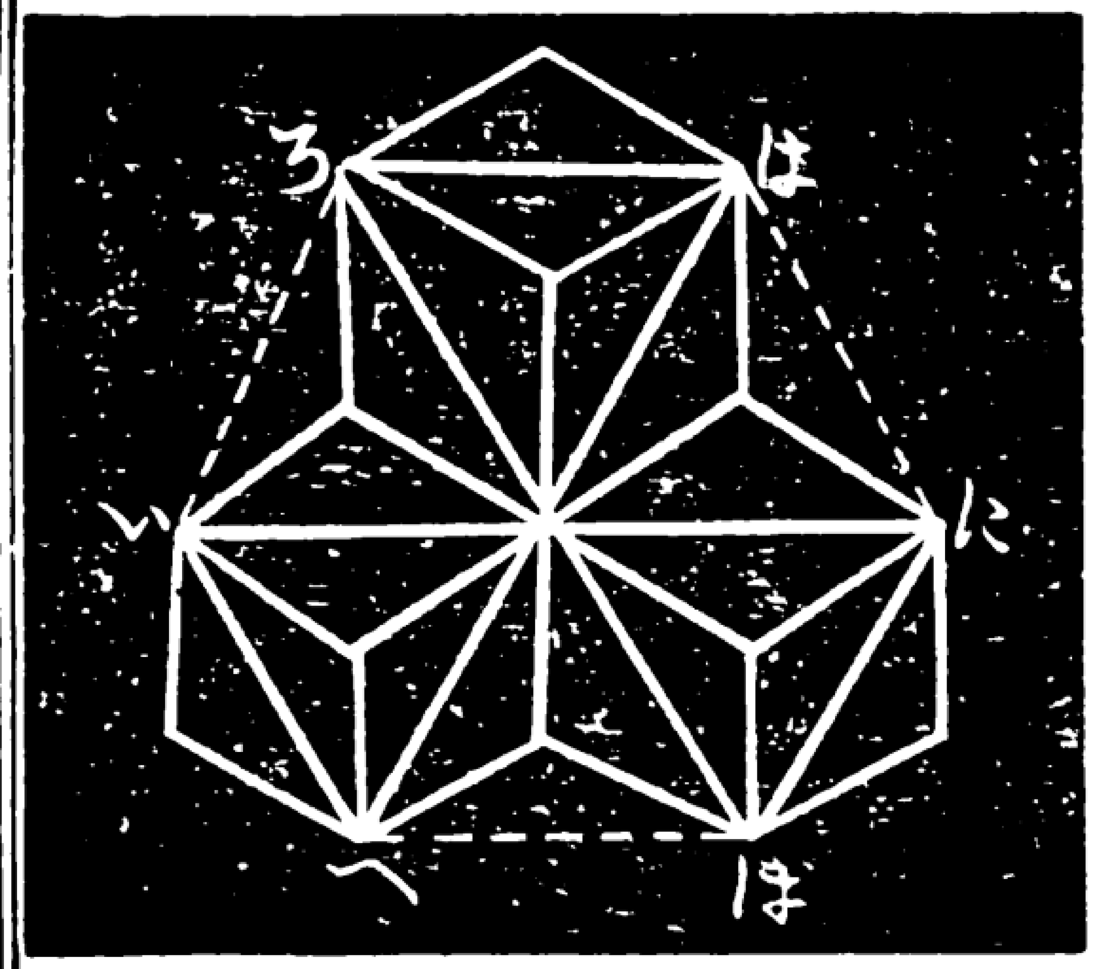
神宮峯子

『六角麻』是れ厚紙で「いろはにほへ」の片紙を切り夫れを當て「いろはにほへ」の線を引くのですそして線を引くのですそして線の中程を見積ッテ順に引きますと中の六角が出來ます　跡ハ圖を御覧にていらつめ方が自由に御引になるのです

扨て角篦で正しく筋を御引に成りましたら外の六角から糸に結び目を多く拵へぬ様順序を考へて前の通り罌粟粒の如く縫ふのです

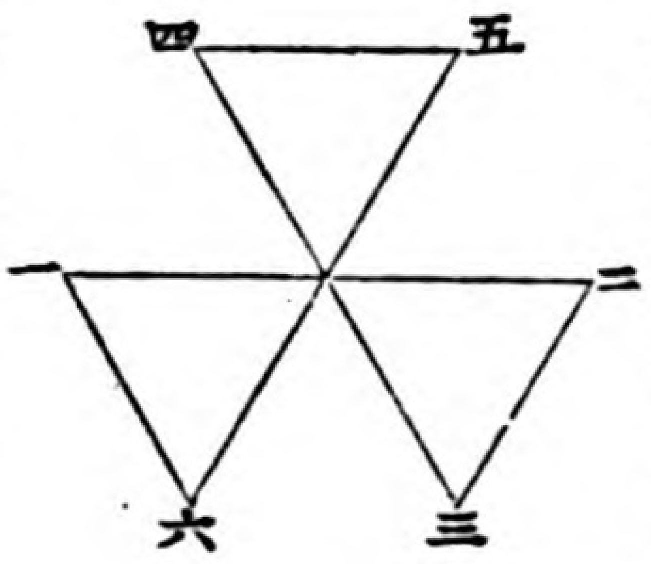
『麻桔梗』是は六角麻と同しく先づ「いろはにほへ」の六角の筋





を引きそして前の通り圖を御覽ふて中の麻を葉を引き跡は六角の外へ一山宛一つ置きに出し角篦で正く 筋を 付けるのです

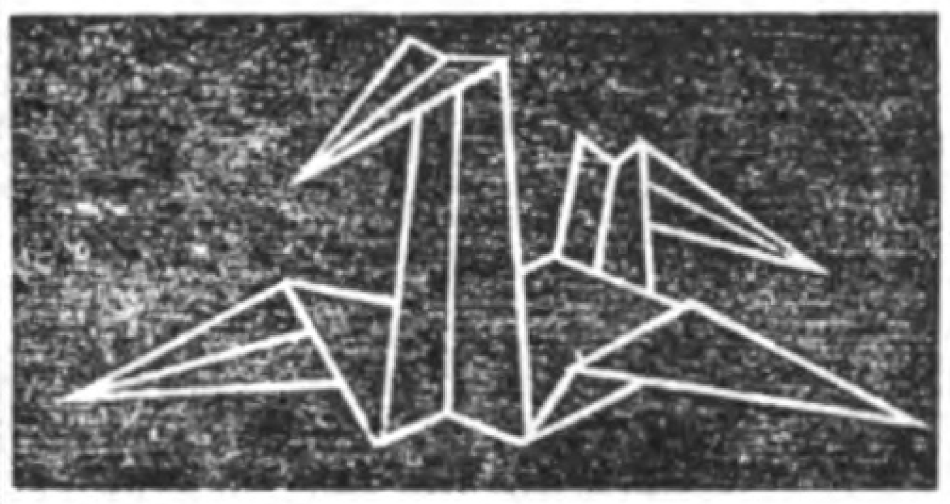
扨て縫ふ時に至り下圖の通り一の點より縫始めるのです



いろ‖はに‖ほへ‖の虚線は縫時に至り圖の如く縫殘すと麻桔梗の形ちが出來ます

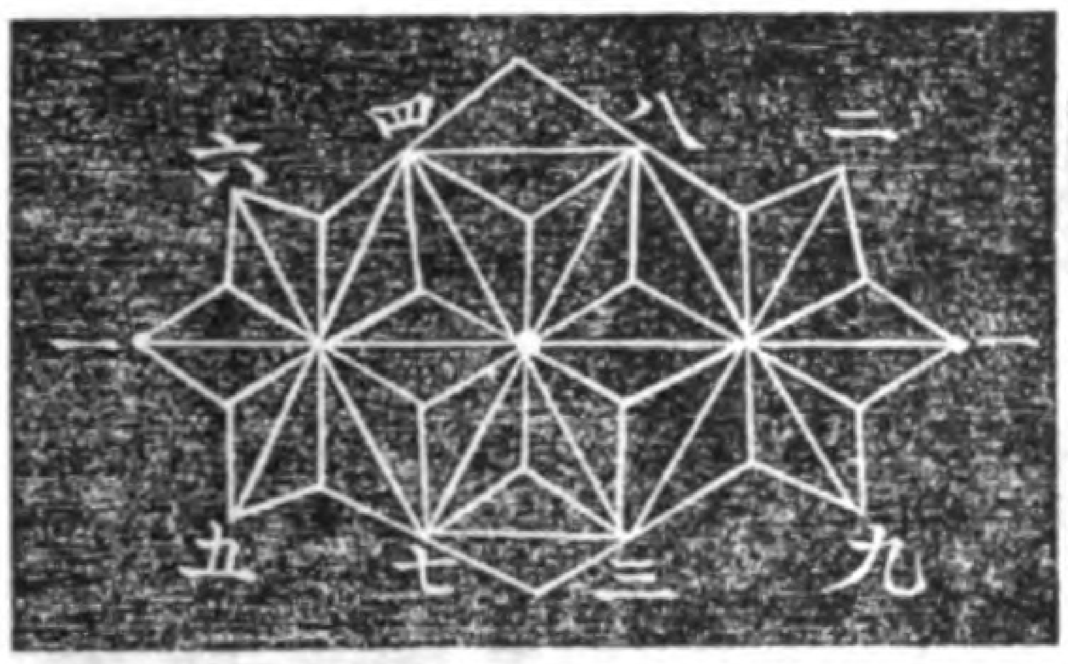
『折鶴』 此折鶴ハ別に割り方もありせんから圖を御覽ふて淑女方が適宜に筋を引きますれば宜しひです

そして筋をお引になつたら鶴の嘴から縫始れば至極手輕るに折鶴の形が出來ます



『獨鈷麻』 是も六角麻の如く先づ六角の筋を付け圖の如く横に六角の中へ線を付けるのです　そして線の長さ三寸ならば眞中の黒點より三寸に成る迄六角の外へ筋を付けるのです　扨一の筋が出來上らば六角の線の中程を見積り置き二より三三より四と九に成る迄筋を付け跡ハ圖を御覽にて出來ます

扨て筋を御引に成つたら　六角の外側より縫始めるのです



改良實用衛生理料法（第十三）

上等料理の部

四十二　鷄、牛房、筍胡麻煮。　鳥を骨附の儘宜い程に切つて鍋に入れ、水を少し加へ、水煮して取り置き、新牛房を一寸程ふ切り又筍は能い程に切り（但し二品共能くゆでるのです）、白胡麻を煎り、摺鉢で能く摺り、油の充分出たのを度として鍋に入れ、鳥の汁を少し加へ、牛房と筍を入れ、胡椒をふり、能く煎り、鳥と汁を入れ、鍋に蓋をして弱火で能く煮、而して醤油に甘味を少し加へ、味をつけるのです。

鳥二百五十目ふ胡麻一合程入れるのです。

四十三　同じく別製法。　雛鷄肉骨付の儘宜い程に切り、鹽、胡椒を振り置き、馬鈴薯の皮を去り、大きいのは四つ又は六つ程に切り、水に取り置き、脂肪と牛酪を鍋に入れ、火に掛けて解かし、葱を細小に切り、馬鈴薯、鳥共入れ、弱火で能く攪き混ぜ、少し鳥に色の付（俗に狐色）いたのを見て、饂飩粉を入れ、又能く交ぜ合せ、肉汁又ハ鰹節汁等少々づゝ入れ、鳥の中程迄汁の入つたのを度として蓋をし、弱火で煮るのです。　鳥が柔かくなれば、鍋を卸し、上に浮いた脂肪をすくひとり置き、又用ゐるのです。

此中へ人參の皮を去り、宜く切つて鹽湯煮にし、入れるのも宜しいです。

又洋葱の小丸、日本葱の上等を一寸程に切り、饂飩粉を

入れる以前に入れるのも宜しいです。

四十四　若き鷄の肉を玉子酢で食べる製法。　鷄一羽を四つに切り、鍋に入れ、水を少し加へて火にかけ、浮き滓を能くすくひとり、人參、葱、鹽を少し入れ、充分水煮にして鳥の柔かくなつたのを度とし、鳥の皮を剝ぎ去り、宜い程にむしつて皿に入れ、殘り汁をかけ、又玉子を湯出、蛋黃を裏漉しにし、芥子、鹽、胡椒を加へ、能く練り、煮切（味淋の煮つめなり）酢を加へて味を付け、此酢は別入物にて鳥の皿に添へて食膳に供へるのです。

四十五　牛の鋤燒調理法洋名ビーフステーキ。　燒肉にする牛肉は內ロース外ロース肉の二種を最良といたします。肉の善惡を見分るには外ロースは厚くて白き脂肪のある肉を上等と致します。　此肉を用ゐ、幅二寸五分又は三寸程に切り、厚さ三分より五分程に切り、庖丁の橫（平なところ）又は麵棒の類で柔かく叩き（然しあまりつよく叩くのは却ってよくないので汁氣の出ぬやうにするのです）、兩面に鹽を振り、片面に胡椒をふりかけ、燒鍋に牛酪を入れ、火に載せ、色の變つた所で肉を入れ、片面が程よく色が付いて燒ければ、ひきくりかへして又片面を燒き、斯うしてむらのない樣に注意し、皿に取り、此鍋に醬油を少し入れ、一沸騰したのを肉にかけ食べるのです。

但し牛肉一斤を三人前と致します。

五社百詠四十二號つゞき　　俊成卿

○荻

荻にしく秋のあはれはなかりけり野はらの花は千種なれとも
かくしもは秋吹く風もおほにしそくやしく宿に荻をうゑける
あき風の荻の葉わたる夕くれは身をわけて吹く心ちこそすれ
聞かきしいく田の森のあき風も荻の葉よりや身にはしみけん
いにしへは哀ときゝし荻の音もことも𛀁ろかになりにける哉

○初鴈

いつしかも鴈は來にけり玉くしけ二見のうらの明かたのうら
もろこしの涙ちや過し秋のかりくもゐに來てもかゝる𛀁す也（本のまゝ）
忘しねはす田面に來ゐて旅のかりおのか常世の物かたりせよ
初鴈は緣のかみのたまつさをかきつらねたるあきのうらかな
歸るかりみしもあはしと思ひしをあはれに秋の空になくなる
　右歸るかりの歌は玉葉集にも出てゐました

○鹿

山ふかみ松のあらしの外にまた宿とふものはさをしかのこゑ
あらしふき籬の荻にしかなきてさひしからぬは秋のやまさと
鹿の音はよそにこそきけ春日野はくさの枕の物にうありける
たのめおきてつまやこさらんさをしかの待かね山の曉のこゑ

こゝろある人はかはかりおもふらん秋の山への夜半の鹿の音

右あらしふきの歌は玉葉集にも出てゐます

○露

秋くれは玉くしの葉も露置てかをかくはしみかをるらんやは

わきの夜も芝生の露をふみわけし猶そのかみの戀しかるらん

野へにこそ露はおくかと思ひしかやとりは梅のたもと成けり

露をたれあたにいひけん住江のまつの下葉の玉にうわりける

花の枝もあさちか末もおくつゆのちれは心のまつくたくらん

○霧

朝霧はせたのなかはし籠てけり行きのこまのおとはかりして

きりはれぬ麓の里はおのつから人のとふさへさみしかりけり

山さとは里への眞荻をかきりにて霧のまかきにうつら鳴なり

朝きりにむこの浪路をみわたせはほのかになりぬ淡路島やま

なそやかくなかむるくもの霧籠るみやまのさとに心すむらん

○槿花

みしひとのなきはおほかる世中に秋はかはらすあさかほの花

月草はうつしの色もあるものを露たにのこせあさかほのはな

朝かほの露も千世をへぬへきと山ちの菊にうつてそへしを

日かけさすほとをもまたぬ槿はたゝ面影のはなにそありける

朝かほを誰かはかなくいひれきし明くれは咲ぬ秋ことにさく

○駒迎

かせふちてあまたみにける逢坂の杉間といへる望つきのこま

きりはらの駒もやここつはれぬらん雲のうへ人あふ坂のせき

あつま路やいく山越にし駒あれや關の岩かとなつまさるらん

ゆふきりのたちのゝ駒を引ほとはさやかにみにす關の杉むら

あふさかの關の清水にことゝはんいくよかみへる望月のこま

○月

月あみの神にもいつていのりみんあきの空には雲なくもかな

久かたの月のみやこもかくやあらんかもの河原の有明のそら

あらさらんのちもこゝろや猶すまん三笠の山の秋のよのつき

たとふへきかたこそなけれ玉へしきてらしかはせる住江の月

この世には又なくさめもなきものを我をはしるや秋のよの月

○擣衣

秋ふかき空ふく風にいせ島やあまのとまやのころもうつなり

つき清み千さとの外もくもつさて都のかたにころもうつなり

野とあれる秋のあらしを寒しとや衣うつなりふかくさのさと

衣うつ音こう空にさにぬなれやのしの屋によやふけぬらん

ふきおろすひらの山風よやさむきみつの濱人ころもうつなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○虫

かみかせや竹の籬のまつむしは千世にちとせの秋やかさねん

ありす河いつきの宮の秋のはな千世をかねたる松むしのこゑ

わきて猶あはれなるかないそのかみふるき都のすゞ虫のこゑ

常よりも露しけしとやきり〳〵す野への旅ねの床に鳴くらん

虫の音はよもきかもとも茂けれと野への旅ねはいふ方そなき

○菊

千ゞの秋も山路の菊は匂ふなり神代より咲く花にやあるらん

みつかきのあたりにさける菊よりや久しき秋の花となるらん

秋くれはひとりさくたにあるものを二度きくの色をかふらん

かたそきや玉のみとのゝ初霜にまかひてさけるしらきくの花

わきをへて思ひそ出る雲の上のはしにまかひしきくの戸の花

○紅葉

龍田姫四方の山邊とそめさらは身にしむ秋のいろをみましや

かみ代よりいかに契りて龍田姫秋のもみちをかくはそめけん

紅葉はのこきもうすきも立田姫こゝろのほとそ深くみえける

住の江やかゝれる蔦の紅葉はは〇〇〇〇〇〇〇〇

たひころも錦たちきぬ人そなきもみちちりかふしかのやま越

文藝美術

第十一回懸賞文藝應募得點の分　第四十三號つゞき

題　難波船圖題　　三坂きぬ(ヒサカ)

○文章

降りそゝぐ雨はしのつく計り、なる神もやがて轟くのか―轟いたのか、閃めく一道のいなづまは靑白い光を碎き、かさなる無賴の黒雲は　荒れに荒れた浪の上を走ッて居ます。此中　たどり來た一葉の舟、今一陣のはやて、無殘、刃を立てつらねた樣な岩角に碎け散りました、人其まゝにして。あゝ　其人―幾ひと、何れ覺語はしたでしやうが、其心はまあどんなでしたらう。昨日までは「家郷に歸ッたりの上は」…「彼地に達してそれからは」…樣々の境遇地位につれての願望は必らず　最愛の兒の愛らしい手にもう幾つ寢たらお父さんはと指折り數へて已を待ッてゐることも思ひ、又最愛の妻の孤衾に結ぶ夢の中にも倘も涙を己を送ッて居ることも思ふて居たでしやうに、それも鏡は影した花、色も香も長なへに茲に絶て仕舞たのです。其時絶えて仕舞ふといふ其時の心は？圖を掩ふても吾眼には恨めしさうな俤もほの見え、耳には苦しさうな聲も微かに聞えます。まこと亂れ動く情感の働きは　身を把ッて妄想の世界に運びます。が、更に念ひ直せば我一人　總て死を控へての生ける身、海―風凪ぎ涙收まッたことの無い世の海に「今日の夕暮なすの明ほの」、時の先後

はあるにもせよ、皆果敢なくなるのです。詮じれば誰一人圖中の人とならぬものが有りましやうか。圓満具足を理想にのみ止めて現實の領分に引入れぬ其間、恨を齎らしつゝも（ながら）拗亡靈となる人―我。

右第一等賞

○淨瑠璃　　無名氏

泣て藻屑に埋む連理の枝。百年の苦樂半途に終る。天永く地久きも時有て盡く。此恨は綿々として絶る期なし。」チロシ「時代は何か白波の。風穏やかなる日本海。わけて今日は空うらゝかに。友呼ぶ千鳥妻戀ふ鴎。通ふ蒸氣や帆前船。中にも海士が漁る少さ舟。乘たる人は河邊助次。熊取權太ハ。打たる網の手を止め 詞権 ヤイ助次兄い今日ハ好天氣やなア已も三年前から此商賣はじめたが今日のよな天氣はメッタに無いわいな 助 ソウトモ／＼わいらは十五年前から海の上の稼ぎダガこんな天氣は數へる程かないわいな」フシ と言葉の下より。起る辰巳の風。次第に荒て逆卷波。二人は思わず顔見合せ」。二人 ヤゝゝゝ天氣の模樣がかはッてきた」権 ヤイ助次兄い」助 オイ權太メッタ今の今までも」権 風も穏やかか雲も無き」助 ソノ天氣が手の裏返す此の荒は」権 龍神さまの祟りでか」助 人間凡夫のあさましさ」権 かゝることゝは白波の」助 上を働く此商賣」。権 兼て覺悟のことゝなれば」助 今更驚くことは無けれど」権 若しも我らが死もせば」助 後に殘りし妻や子は」権 メッタ一人の親父さん」助 何如して月日を送るらうや」権 サゾ歎かッしやるであらふかと」助 思へは胸も塞がりて」権 櫂とる力も」兩人で 出ぬわいな」フシ 鬼を欺むく荒稼の。二人のものも眼に涙。必死となりて押ども漕ども。舟はます／＼。沖へ／＼と流され。遂にくだけて見へずなりたる」此方の濱邊に轉び出たる。助次が妻のおしん。悴の幸次は。まだ七つの狂戯ざかり。義理も人情も白露の。幼心にも悲さの。目元滋はし兩手を合せ」幸 モウシ神さま佛さま父さんの命を助けて」フシ 下さりませと聞くより。母のおしんは堪かねて。ワット許りに泣き倒る。後へとばく／＼權太が翁父權九郎。老いの涙に鼻つまらせて」翁 コリヤおしんさんか。今日はひどい荒れになつたわいの。悴や助どのゝ身が氣遣はしく。茲まで來たは來たものゝ。我身やこなさんの力でハ。何んともしやうが無いわいの」しん アイ阿父さま阿父さま」フシ と許りにて。歎きに沈み。言葉もなく／＼。舟ある方を。見つめ見はりて。居たりしが。流るゝ涙をし拭ひ おしん 昔し橘姫さまとやらは。身を沈めて尊さまの御難をお助けなさつたとやら。妾は賤い身なれども。夫を思ふ心は同じこと。此身を沈めて助さんの。オヽそうぢや／＼」フシ 心も空に足元も。たよ／＼。海へと馳出るを。悴の幸次が袂に取附き」幸次 コレ母さま何處へ。父さんや母さんが死にし

やるなら。己らも一所について行たい。おしん オー尤ともちや〳〵「フシ可愛やな。二人りの親に離れては。誰に便りも目なし鳥。不便さまして。氣とはり弓の心もくだけて幸次を抱上げ抱〆て」おしん セメテ祖母さまの生て居て下さればまたもしやうの」。「フシ有らうのに。子を助くれば夫の命。死なばもろとも。冥途の旅も手と取りて。蓮の臺で差向ひ。千代も八千代もかはらじと。契りこめたる」詞 助さんの難義を助けんと思へば」フシ幸次が命。心二つに身は一つてんたうさまも聞えませぬ。露ちりほども情てふことご存じなら」詞 妾の身をば二つにして」フシ二人の命を助け給はれと。心も亂れ氣も亂れ。前後不覺に泣き沈むを。慰さめ兼たる權九郎」權 オヽおしんさん尤もちや〳〵。お前の歎もさることながら。我身は茲年で杖とも柱とも。賴むハ權太只ひとり。神佛さまのお力で。悴の命とかへて下されば。私や嬉しいけれどな。夫も願ふたところで出來ぬこと。アヽ長生はすまいものだなア」フシ燒野の雉子夜の鶴。凡り生とし生るもの。子を思はぬはなきものを。況てや人の身は。貴賤上下の區分なく。子にひかさるは親のつね。茲に三人りが歎きのかず。見るも不憫はイやまさる

右第三等賞

右譯 原稿に名がなかッたため詮無く無名にしました。又修辭はよくも調ひませんが、浄瑠璃に珍らしいまゝ取上ました。

第十二回題賞文藝應募得點

題 處女の愛情

得點の分も開く前に言ふ事が有ります。 素より此題は六かしい題、従來の日本風の詠じ方では中々うまく行かぬものゝ扨研究にハ最も必要なものと思ッて出しましたが、果して御投寄の中で題外の作り方又は愛情と笑顔とを混同したやうなのが多くて實に當惑しました。 今度は題をさしおにさへして待つて居ましたが、充分に行かなかつたのはまことに殘念のいたりです。 が、兎に角其中から拾ひ出して見ました。

○俳句

ひなぎくや蝶くるまでに咲きにけり……鵑望山人（ヒセ）

右もやゝ題外ですが、辛く取り上げられます。

をとめ子や蝶とる猫をなでとゞめ……まつの（イハシロ）

心から落るまことのひとしづく……岡本皎子（トウケイ）

右皎子女史のがやゝ題に近づきましたが句の表に處女の意が現れて居ません

愛情とおもへばぬるし春の水……桂瓣小史（トウケイ）

右中々氣取られましたが意があまつて句が足りません

以上三首いらつめ一部

たつぷりと馨をもつ梅のつぼみかな……神谷　文子(ゴビン)

右いかにも句は巧ですが、處女の愛情の意味がまだ〳〵充分しません。

右一首三等賞

なでしこの花のこゝろや垣一重……石川のぶ子(ミカハ)

是が秀逸でした。　一點も批難が入りません。

右一首一等賞

○唱歌　翠　亭(トロケイ)

風さむく氷てる冬、　石やけてかねとくるなつ、
暑さ又さむさにつけて　ねぎ禱るかみまたほとけ。
打ち過ぎよいとすこやかに　君がみにつゝがあらせず。
いたつきに君もし臥さば　その苦にはわらは代らむ。
玉のをのよし絶ゆるとも　をしからじ君がためには。
あなうれし君にあふ日は(きみにあふうれしさにつけ)
甲斐の無き身をうらむかな。　かねてより逢ひなばかくと
あやなせし數の言の葉(あやなせしから言の葉まで刪る)
しらせなん心の誠(この句もけづる)
いひとげん心のたけと　はづかしとくでもる口、
うつろふは(時ならぬ)顔のもみぢば、——
とどろくは胸のはたらき(この句もけづる)
いはでやむ心のかひなき。
かの君(人)がなさけのふかき、心さへめでたくやさし。
ひとすぢにわれは願はじ、　もゝとせのにゝにし結ばん。
なしとげん苦樂も共に。　ゆだねなむ身の行末も。
いつの時われ彼きみ(人)と　いもよせと呼びかはしなん。
ながむればうらやまし鴛鴦、　いつ見てもむつましゝ、雌雄。
いかなれば人と生れて　われはかく罪さへふかき。
鴛鴦よ、鴛鴦、あゝ鴛鴦よをし汝がこゝろいかに樂しき。

○右比較してよく情を穿ちましたが修辭が花やかで無い、それが瑕です。　また兎角句を重ねる句法ですが、重句といふものは中々輕卒に用ゐるべきものでは有りません。

(未完)

紅墻記

美妙齋主人

梅を見ての歸りみち、浮動する暗香のかはりに物思ひの種に爲る伽羅のかをり。あゝ君が裏鼠の蝙蝠に照りあへぬ日を人の目もろともに逃げて樹陰に休はれた風情を、人は見ずとも戀ひにやつれはてた身の目に止まらずに居やうか。今のわが目にもさしぬけた君の領闕が後毛をほろつかせた体がありありと見ゆるものを。あゝ君、歸り去つた紅墻の陰、白薔薇が春に蕾の夢をも今やぶる体見れば君の此後の世界も推しはかられて。あゝ君の行く人は月の桂男、齊眉の契り色は褪めず、夫に塗られたものならば白玉の乳房の下蔭に殘る守宮の血色もむしろ血黒子となつて夫の名をあらはせ！ それまでの君の此後、あゝ天、天の美の幸福はたゞ君一人にとゞまつて、及びもつかぬ傍觀の身がさても恨めしい。まことと春三月桃の夭々、この子こゝに歸いで王母が仙家の昔を繼ぐ事。あゝ世界の男子、また女子、君が花の殿の校舍に得た名譽の見本を試みに問へば宇宙たゞ月も美、また花も美、男女ことゝに無限の怨みを懷けば春といふ名もあゝ〳〵物思ひの種。

俗曲改良家の意見

俗曲改良といふ人は可なり有つて韻文振興と稱ふる人は少なく、歌謠を教育の一方便としやうといふものは有つて、歌謠その物を唯一のものと崇めてかゝる人は有りません。一般の人心がすでに是だけ、どうして今直に韻文の美を得られましやう。

俗曲改良家、ことによると歌謠教育家に關してわれ〳〵が抱く反對の意見を細事こと〴〵く略して、唯一つの事に就て論ずれば俗曲改良家が俗曲改良について抱く意見が其口に似ず固くない事です。

彼等は俗曲の改良すべき事を言ひました。 何が故に改良するかと言ふに亦例の古來の言句の猥雜卑陋なのを厭っての事でしやう。 猥雜卑陋は言ふまでも無く惡い事です。 或は改良も加へていゝかも知れません。 が、彼等がみとめて猥雜といふ處こと〴〵く吾々には猥雜と見えず、かれらが評して不條理といふ處こと〴〵く吾々には不條理とも見えぬ、そこに就て辨を費せば中々盡きぬ事です。

先人の作を改めるといふ事は後人にとても出來ぬ事です。と吾々は斷言します。 哲理か宗教の各家の解釋によつて先

人の筆を改める位ならもとく理で論ずれば、つまり理の鑄型に入れて改めても宜しいです。感情が主で、後世の局外者から見た目を以てどうして、それに喙が入りましやう。よしや一つ二つ、適當に目が入つたにしろ、それ故に全豹を托する譯には行きません。

ことに俗曲改良家について怪しむべきは音律諧數の將來ハどうしたらいゝか更に言ハぬ事です。いやしくも俗曲改良といひ出されたからにハ音律の心得も多少あッた、將來の音律にもいくらか考への有る方でしやう。が、不幸にもわれわれはまだ其一人にも接しません。これはひとり今日の俗曲改良家にある弊ばかりでも無く、むしろ韻文に口を入れるやうな人にさへある弊で、敢て公言しますが去年中石橋忍月氏が作られた譯詩、又は嵯峨のや氏の坂東武者、香に醉ハんためなどいづれもく無調無律です。唱歌の文章か、何とも角ともわからぬ、これら先達がすでにこれです。

俗曲改良家には怒られましようが、われくは近体唱歌の中では端唄を以て上乘と信じ、大津繪を以て究竟と考へます。前のは整ッて趣向文句ともに優美婉麗、後のは亂れて粹敏活發。その音その律に至ッては驚くべき程の整頓變化。今日の其方々が然るべく玩讀されるべき事です。

只端唄を崇め、大津繪を倚んでもわれくは直に此体を今後の韻文としろとは言ひません。多少之に附け加への考へも吾々には有ります。今後折りを見て又言ましやうが、唯改良をのみ口に唱へる論者をば飽くまでも賤さなければ爲りません。

寄書

小説募集の廣告に就て

嗜文會主人

本會か廣告した、懸賞小説募集には、其題意に對して、彼此書面に問合されたり、亦殊更に本會迄足勞せられた方々も已に八九人に及ました。そこて今其の題意に付て一言述るとなりました。古句にも＝＝春は長閑に秋寥し＝＝、本會の趣意は全くこれてす。則春意これなのです。されは櫻花爛熳とか春露團々とでも月朧々桃夭々、とでも宜しいです。只春意それを土臺とされたいとです。だと云て寂幽愁寥な秋にも、月に無限の樂を喜ひ、合蔭陽々たる春に悲境に沈溺して世の長閑を恨む人も有る、畢意それらハ作家の意匠に有ると、敢て本會は彼此申さず

只題意に就て申せば先右の通りです。

通信問答

三好野綱生さまへ　東京にある商業學校の預備校はまづ商業業務學校ぐらゐな
ものでしやう(二)口中の臭氣は含漱香水を常に用ゐろうして口中の掃除を怠らなけ
れば消ねます(三)擬はずに毛をたゞ濃くするには幾度もかみそりを中てるのです。
　もみぢさまへ　(一)いらつめは國語で皆さまの御存じの「稚郎子」もイラツコで
即ち男子、コがメになつたのが女性で即ちイラツメです(二)早く習字に熟するに
は支那人のやうにガラスを手本の上へ置き、其上を眞似て習ふ方が宜しいです
(三)こんにやく版製法は既に前號のいらつめに出て居ました(四)北邙散士この本
名は子細あつて言へません柳澤子の本名は廣津直人(五)胃の養生には毎朝食前二
十分ばかりの頃に茶のみ茶碗に一杯ばかり鹽湯をのむのが宜しいです
　繁野さまへ　(一)麥わらを白くするには亞硫酸瓦斯か硫酸かを用ゐるが宜しい
です。第二以後の御問は漠さしたもののゆゑ答へません。
　かつ子さまへ　(一)黑羅紗帽子洗濯法は前號のいらつめに出て居ました其他の
御問には答へられません
　大石いし子さまへ　(一)カゲロフさはトンボ即ち蜻蜓の事です。遊糸さいふ意
味も別にあります(二)竹のや主人は饗庭篁村氏です(三)硼砂は一寸見た處では如
何にも生明礬に似て居ます。
　梅花女學校生徒さまへ　(一)弘法大師いろは歌さいふものが法帖にあり、千蔭百
人一首も、亦定家の書体も従原殿などに法帖になつて居ます(二)冬唇があれたのに
はリスリンを幾度も引くさ直ります。
　夕山人さまへ　酉の市の阿龜女郎さは毎年東京などでも十一月の酉の日に阿龜
のついた熊手を賣る、うの阿龜のやうださの比喩です(二)韋駄天とは佛書から出た
神の名、よく走る神さの事で、うれ故よく走るのを韋駄天ばしりさ言ひます(三)「ぢ
れつたい」は待ちこがれていらだつ心、「いみじき」とは微妙又は神妙の意、「しほら
しい」さは流石に感心の心、「もどかしく」は前の「ぢれつたい」さ同意です(四)美妙
齋主人が一番はじめに書かれた小說は風琴調一節さていらつめ第一號から數號に
連載してあるものです(五)佐々木みつ子女史は弘綱氏の令夫人、信綱氏は令息です
(六)舍密學さは化學の事です(七)審美學さは俗解にすれば美術哲學の事です
　疑問　(一)日本育兒法書物一切の名(二)木乃伊をミイラさ讀む譯…仁科美蘭(貴
答本月廿日限)
　次號には(答書)紀洲納豆製法、地圖などの名が有ます

餘興

(一)皆さんがよく御用ゐになる彼身の齒磨は何でしやう…………伊藤みさ子
(二)むかしある人が町へ買ひ物に出ましたが生憎一錢も持ち合はせが有りませんので已むを得ず買はずに戻りましたが、後で聞くと此人は天竺で名高い人であツたさうです…………夕山人(イと)
(三)一斗の酒を三人に等分する法は一斛桝ばかりで出來るさうです…………は　る(イゼ)
(四)日本の國の名二つ、甲の國の中を取ツて乙の國の中へ入れると乙は甲の國となり甲は乙の國となります
(五)二十一を分ければ鳥となる
(六)斜方形の謎、一は地理、二は虫、三はある俳優の褒辭、四は遊戯道具、五は武器…………以上三題……しみづ(マゾと)

第卅八號餘興の答へ

(一)四角(詩歌句)(二)戸のサル(三)やまと(矢、的)又はひたち(火、太刀)(四)彈丸(五)こねこ(六)帶
皆答者　海老原貞子、中島廣
五題解答者　山中てい、堀江しづ子、清水直司、齋藤てる子、市野、大川まさ

解答者心得　皆答者にはいらつめ二部、五題解答者には一部○解答紙は第四十六號ゐ附錄として入れます○其號の解答紙に認めてない物は沒出○御投寄の新謎を出せば其號一部進呈○本號解答御送付は來る四月五日限り

○懸賞文藝新題

○第十三回題（唱歌浄瑠璃及び文章に限る）
右　桃花　二月二十日〆切
○第十四回題（文章）
右　春月　三月十日〆切
○第十五回題（唱歌）
右　こずの燕　三月十日〆切
○第十六回題（和歌唱歌句及び文章）
右　春の空　三月二十日〆切
○第十七回題（何でもよし）
右　雨中に櫻を折る　三月二十日〆切
○第十八回題（何でもよし）
右　いとまごひ　四月十日〆切
○第十九回題（何でもよし）
右　若葉かげの假り寐　四月二十日〆切
○第二十回題（何でもよし）
右　初夏の鐘。　五月十日〆切

右文藝應募者心得

第一　題を種にして成るべく趣向を立てるのを尙ぶ事○第二　唱歌浄瑠璃及び文章は各一千五百字以内の事○第三　一人で二種類の作を投せられた人は一種類各別々の紙に書く事○第四　原稿には宿所姓名明記の事○第五　原稿は半紙ニ限る事○第六　第二第三第四及び第五に背くものハ沒書。賞品は一等賞淸親良信二氏の內御好みの**肉筆着色絹地**畫家の手に成つた畫帖だけの大さの一面○二等いらつめ十二部○三等三部。

懸賞小說募集廣告

●題　春季ニ係ル者　●頁數　一頁十二行一行廿四字詰五十頁以內　●文体　何種を限らず　●宿所　姓名は別紙に認め原稿には別號亦は符號を記する事　●期日　四月十日限堅〆切　●賞品　壹等金拾圓　貳等金五圓　三等金五圓　以下秀逸之分五種を撰拔し以良都女一ヶ年分より三ヶ月分迄亦ハ其に相當する書籍雜誌を贈呈する事

●撰者　山田美妙齋主人

●受賞之小說は此を以良都女に掲載するか亦は一部の書として出版する事

●原稿屆所　大阪市西區南堀江上通四丁目百十四番やしき

嗜文會

●淺草小島町五十七番地**國語講習會員募集**　毎月會費金三十錢

●大學卒業の諸君を聘し（土曜日女子日曜日男子）國語を講習す有志の方々速に入會あれ委細は二錢郵劵を寄せて規則を見よ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY